

第6回 テーマ 神戸市立博物館 – デ・キリコ展

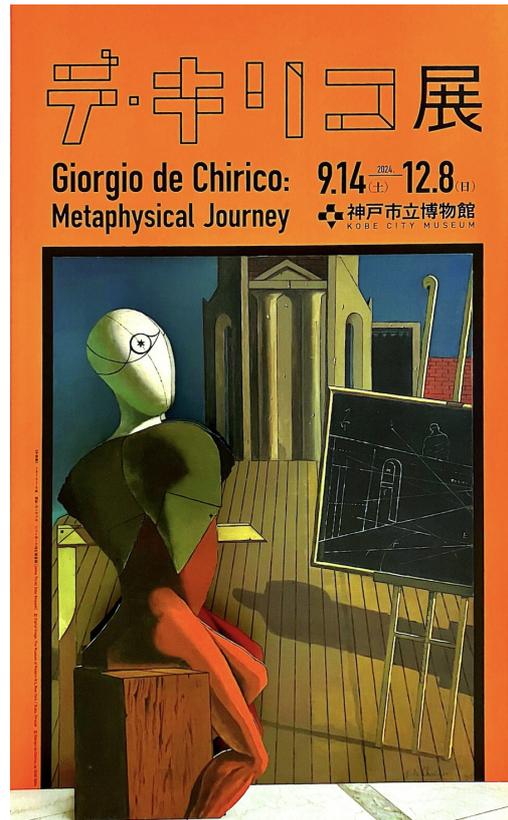
〈日時〉 2024年10月22日

〈場所〉 神戸市立博物館

ジョルジョ・デ・キリコ (1888-1978)



- ◆イタリア人の両親のもと、ギリシャのヴォロスで誕生。
- ◆1910年頃から、日常の奥に潜む非日常を表した「形而上（けいじじょう）絵画」を描く。
- ◆サルバドール・ダリやルネ・マグリットといったシュルレアリスムの画家をはじめ、数多くの芸術家に衝撃を与えた。
- ◆1919年以降は、古典絵画の様式へと回帰。それと同時に以前の形而上絵画の題材を取り上げた作品も制作した。
- ◆90歳で亡くなるまで創作を続けた。

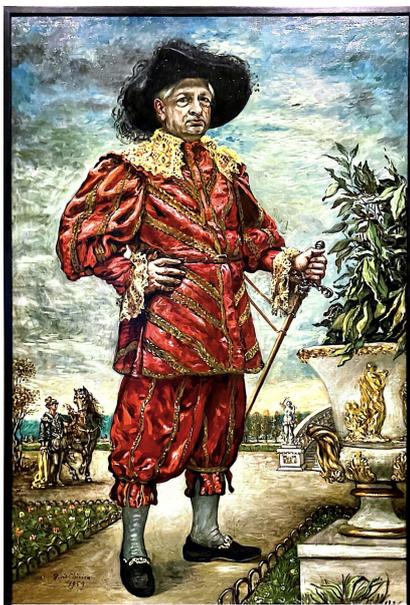


★地下講堂で本展示会の概要説明

デ・キリコの70年にわたる画業をテーマに分け、初期から晩年までの絵画を余すところなく紹介。彫刻や舞台芸術も展示する、日本ではかつてない規模の回顧展。関西での展覧会は約20年ぶり！



【鑑賞】



🔍 デ・キリコを読み解く 17世紀の衣装をまとった公園での自画像

真っ赤に輝く衣装

深紅のピロッドに豪華な刺繍や襟元が華々しい17世紀風の衣装。制作に際し、ローマ・オペラ座から舞台衣装を借用した。遠い時代の衣装を身にまとうことで、現在の自己から時間的に脱しようとしたのだろうか。一方で、いにしえの巨匠たちに自分の姿を重ねたのかもしれない。

神話や古典を想起させるモチーフ

古典的な衣装をまとった馬を引く人、神話の登場人物のような彫刻などが画面に配されている。



自信にあふれた表情

堂々とした姿で、こちらを見つめるデ・キリコ。自己陶酔的な表現は、当時批評家たちの論争的になった。

画面全体を覆う

「マチエール」

デ・キリコは、絵具の層の重なりや、色彩の複雑な接合である「マチエール」の重要性を強く主張した。

★他にも自画像がいっぱい。自己顕示欲強い人ですね！

沈黙の像（アリアドネ） 1913年



球体とビスケットのある
形而上的室内 1971年

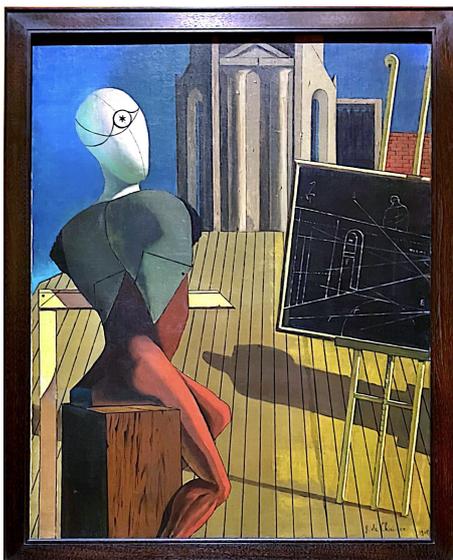


街角で遭遇した
形而上的な情景

孤独のハーモニー
1976年



予言者 1914-15年



デ・キリコにとって重要なモチーフであったマヌカンを描いた最初期の傑作。アーケードのついた神殿、レンガ塀、彫像の影など、それまでの形而上絵画で描いた様々なモチーフとともに、腕のないマヌカンが登場する。

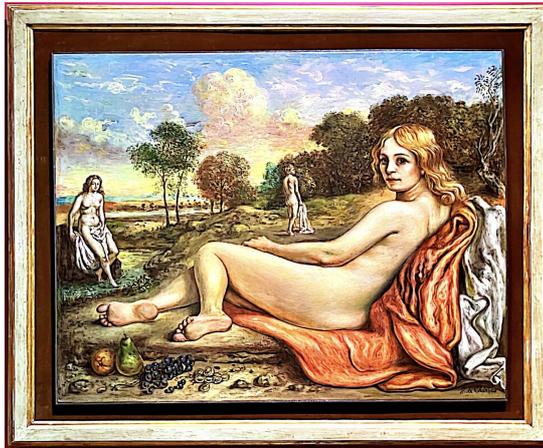
形而上的なミューズたち
1918年



顔のないマヌカンは不可解で異様な印象を与えつつも、どこか記念碑的な威厳をも備えている。

★他にもマヌカン（目鼻口なく表情がない）を描いた多くの絵画がある。いずれも想像をかき立てる。

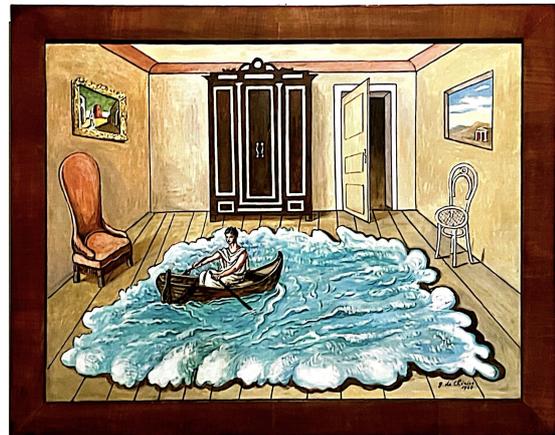
風景の中で水浴する女たちと赤い布
1945年



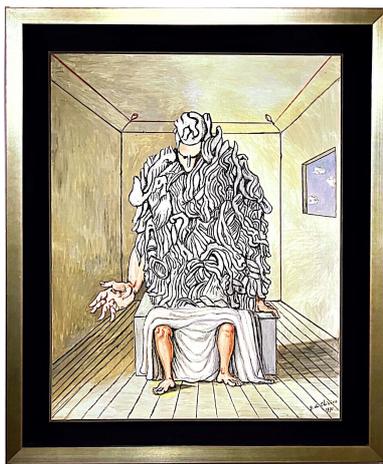
神話？ 現実？ 彼女の正体は、
古典への回帰、17世紀のバロック絵画、
19世紀フランス絵画からの影響が窺える。
横たわるのは後に妻となるイーザ。
デ・キリコに多大な影響を与え、彼を生涯
にわたって支えた。

オデュッセウスの帰還 1968年

自らを英雄になぞらえて描いた
晩年の新境地的な作品。
新形而上絵画と呼ばれている。
デ・キリコの人生を詰めたよう
な作品である。



瞑想する人 1971年



なにもの？！
舞台の背景のような簡素な室内に
素性のわからない人物が座っている。
謎めいたなにかに上半身覆われたもの
は何なのか？

★ 今回のデ・キリコ展は形而上絵画、新形而上絵画、そしてマヌカンと
理解し難い言葉とキャラクターに悩まされる鑑賞会だった。
想像はかき立てられるが、じっくり鑑賞すればするほど謎に引き込まれる
不思議な体験であった。
心配していた天気もなんとかもってくれて、楽しい鑑賞会となった。
お世話になったCAのご両名、クラスの皆様、ご苦労様でした。